



編集・京田辺市観光ボランティアガイド協会

目次 神代編

はじめに	1 頁
「古事記」、「日本書紀」について	//
「古事記」、「日本書紀」の相違点	2 頁
天地創造と神々の誕生(古事記・上巻)	2 頁
1 天御中主神	//
天津神社	//
2 高御産巢日神(高木神)	3 頁
3 神産巢日神	//
4 津速産靈神	4 頁
酒屋神社	5 頁
「神世七世」	5 頁
5 伊耶那岐命	6 頁
6 伊耶那美命	//
天神社	//
「契り」により生まれた神々	6 頁
7 大綿津見神	7 頁
8 天之水分神(速秋津神の子)	//
水分神社	//
9 大山津見神	8 頁
地祇神社	//
10 宇迦之御魂神	//
咋岡神社	9 頁
11 火之迦具土神	//
12 豊宇气毗売神	10 頁
笠上神社	//
13 建御雷之男神	11 頁
「禊ぎ」によって化成した神々	11 頁
14 天照大御神	12 頁
15 月読命	//
月読神社	12 頁
16 建速須佐男命	//
新宮社	15 頁
「誓約」によって化成した神々	15 頁
17 多紀理毘売命	//
18 市寸嶋比売命	//
19 多岐都比売命	//

巖島社	16 頁
20 正勝吾勝々速日天之忍穗耳命	//
21 天之菩卑命	//
22 天津日子根命	//
薪神社	17 頁
「天石屋戸伝説」	17 頁
「大国主の出雲建国」	17 頁
23 大国主命	//
須賀神社	18 頁
24 少名毘古那神	//
御霊神社	//
「大国主の国譲り」	19 頁
25 事代主神	//
石船神社	//
26 建御名方神	20 頁
「天孫降臨」	20 頁
27 日子番能邇邇芸命	//
28 饒速日命(天照国照彦火明命)	//
朱智神社	21 頁
29 天宇受売命	22 頁
30 猿田毘古神	//
31 天児屋命	//
神南備神社	23 頁
32 布刀玉命	//
33 伊斯許理度売命	//
34 思金神	24 頁
35 天手力男神	//
37 火照理(海幸彦)	25 頁
38 火遠理命(山幸彦)	//

目次 天皇編

初代神武天皇	26 頁
「神武東征」	//
第9代開化天皇	28 頁
日子坐王	30 頁
山代之荏名津比売	//
沙本之大閼見戸売	//
息長水依比売	//
袁祁都比売命	//
第10代崇神天皇	32 頁
建波邇安王之反逆	33 頁
第11代垂仁天皇	34 頁
垂仁天皇と妃達	//
その他の出来事	36 頁
第14代仲哀天皇	37 頁
不遑池	38 頁
鉾立の松、鉾立の杉	//
武内宿禰	39 頁
景行天皇紀	//
成務天皇紀	//
仲哀天皇紀	//
応神天皇紀	40 頁
仁徳天皇紀	//
第15代応神天皇	41 頁
佐牙神社	42 頁
山崎神社	43 頁
伽波羅伝説	//
第16代仁徳天皇	45 頁
磐之媛	46 頁
日本最初外国蚕飼育旧蹟石碑	//
第15代武烈天皇	47 頁
第26代継体天皇	49 頁
継体天皇の妃達	51 頁
観音寺	52 頁
筒城宮の候補地	53 頁
①都谷付近	//

②普賢寺付近	53 頁
③三山木・越前付近	54 頁
④飯岡丘陵地	//
⑤田辺高校北東付近	55 頁
⑥薪堂の後付近	//
⑦田辺警察署付近	//

参考文献	56 頁
編集委員	//

『京田辺市の記紀を巡る』

はじめに

京田辺市は京都と奈良の中間にあって、東側には古代、海上交通として非常に重要な役割を果たした木津川が流れ、西側には甘南備山、高が峯、千鉾山、辻山など150mから300m級の比較的低い山々が枚方市との境界をなしています。奈良時代には都亭駅とて「山本駅」が設置され、陸路海路共に交通の要所として栄えた街です。このように地理学的且つ歴史学的にみて、古代から重要な場所であったと考えられます。

従って、古事記・日本書紀(以下記紀と表す)には、京田辺市を含む山城筒木地方の数々の神話や伝説、土地の名の由来などが記されています。又、古の神々が祭神となっている神社や、天皇創生期の皇族、貴族、豪族など、「記紀」に登場する人々の伝承話や足跡があちらこちらに存在しています。

今回、京田辺観光ボランティアガイド協会では、「記紀」に記述されている神々の物語と、京田辺市内の神社の祭神の関連性について紹介します。

「古事記」、「日本書紀」について

「古事記」は壬申の乱に勝利した天武天皇の命により、編纂されたものです。日本には「古事記」と「日本書紀」の両書が成立する以前に「帝紀」と「旧辞」がありましたが、これら二つの書を調べ直し、再編成したのが「古事記」です。当時28歳の舎人・稗田阿礼が暗誦していた内容を、後に元明天皇の詔により太安万侶が書き記したと言われて

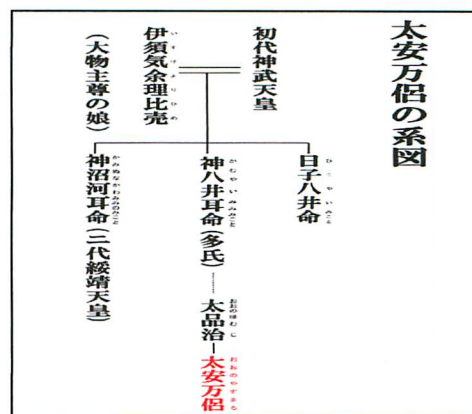
います。稗田阿礼は天の石屋戸伝説に出てくる天宇受売命の後裔ともいわれ、驚異的な記憶力の持ち主で、一説には巫女だったとも言われています。太安万侶は神武天皇の皇子・神八井耳命(多氏)の子孫といわれ、父は壬申の乱で大海人皇子について活躍した多品治とされています。昭和54年(1979年)安麻呂の墓が発見され、実在の人物だった事が証明されました。



甘南備山から京田辺市を望む



山本の都停駅



太安麻呂の系図



太安麻呂の墓

「古事記」、「日本書紀」の相違点

記紀の性質の内、古事記は天皇家の私史という意味合いが強く、日本書紀は外国、特に唐に通用する正史として編纂したものです。記紀の相違点はいくつかありますが、これが主な相違点でしょう。

「古事記」と「日本書紀」の相違点		
	古事記	日本書紀
編 者	「帝記」、「旧辞」を暗誦した神田阿礼が語り、太安万侶が筆記した。	川島皇子、忍壁皇子ら皇族6人、中臣連大島ら官人6人が編纂、その後、舎人親王受け継いで完成。
性 格	天皇家の私史	海外、特に唐に通用する正史
期 間	天地発動～第33代推古天皇	天地開闢～第41代持統天皇
巻 数	全3巻	全30巻
表 記	漢文体（日本語の文脈を生かす） ひらがなの起源が見える。	漢文
その他	・出雲の国・大國主命の話が重要な位置を占める。 ・氏族の系譜に対して関心が高い。	・出雲を起源とする神話が登場しない。 ・中国思想の影響がある。

記紀の相違点

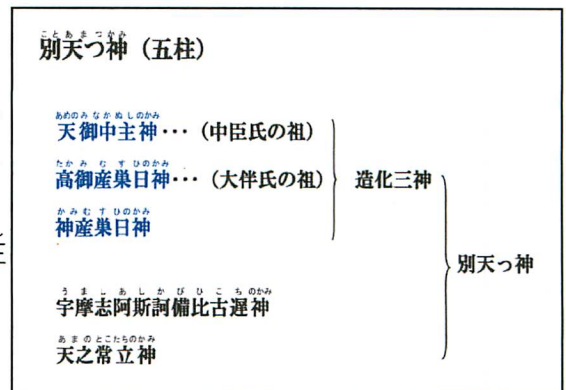
天地創造と神々の誕生（古事記・上の巻）

【造化三神と五柱の別天つ神】

古事記・上の巻には天地創造と神々の誕生が書かれています。まず五柱の別天つ神について述べられています。

天地が始まった時、高天原にお成りになった神の名は、
天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神で「造化三神」といいます。（この三神の内、高天原の中心神は天御中主神であるが、日本書紀では神代七世の最初の神・国常立尊とされています。）

その後、宇摩志阿斯訶備比古遲神、天之常立神が現れ、この五神を合わせて「別天つ神」といい、すべて独神として現れ、そして姿を消しました。



別天つ神

1、天御中主神：天御中主神(記)、天御中主尊(紀)、天御中主命(続紀)

天地初発の時に高天原の神聖な中央に位置する神。別天つ神の一神で、中臣氏祖神ともいわれ、京田辺市では須賀神社の摂社・天御中主社、天津神社の祭神です。

〔天津神社〕

所在地：大住岡村。祭神として天御中主神、仁徳天皇が祀られています。旧無格社、天禄年間(970年～972年)と伝えられるが、仔細不明。若宮社、若宮八幡宮ともいわれ、元和3年(1617年)に社殿を修造した。本殿は江戸時代末期の一間社流造、檜皮葺。
毎年10月14日に行われる月読神社の「大住隼人舞」が宵宮に奉納されます。



天津神社

②〈須佐之男命と生産の神・大宜都比売神の出会い〉の項では、高天原を追放された須佐之男命が地上に降り立つ前に腹ごしらえしようと、大宜都比売神のもとへ立ち寄りますが、穢れた食べ物を出されたと勘違いして、怒って大宜都比売神を殺してしまいます。そこに神産巢日神があらわれ、須佐之男命にこれら五穀の種と蚕を葦原中国へもっていくよう命じるのでした。この話からも、生産の神であることが伺えます。

③〈大穴牟遲神(大国主神)の受難〉の項では、大穴牟遲神は、兄達八十神のいじめにあいます。その1つに真っ赤に焼けた大岩によって焼き殺された時、母・刺国若比売は高天原に登り、神産巢日神に彼を生き返らせてくれるよう懇願します。そして治療の神が遣わされ、見事大穴牟遲神は蘇生します。この話からも、この神が再生の神であることがわかります。神産巢日神は須賀神社の摂社に祭られています。

大国主神が受けた数々の受難

1、大国主神の兄弟神(八十神)の嫌がらせ

- ① 真っ赤に焼けた大石を転がし
落とされ焼死する。
 - ② 木の割れ目に挟まれ、圧死する。
- 神産巢日神に
助けられる。

2、須佐之男命の試練

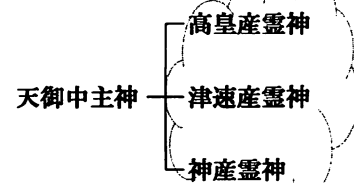
- ① 毒蛇の部屋に寝かされる。
 - ② ムカデや蜂の部屋に入れられる。
 - ③ 鳴鶴を荒れた原野に射入れて、その矢を取りに行かせ、その間に原野を焼き払う。
- 須勢理毗売に
助けられる。

大国主神が受けた数々の受難

4、津速産霊神：津速産魂尊(先代旧事本紀)

古事記にある最初の神は「天地初めて発けし時、高天原に成れる神の名は天之御中主神、つぎに高御産巢日神、つぎに神産巢日神。この三柱の神はみな独神となりまして、身を隠したまひき。」とあります。津速産霊神は『古事記』、『日本書紀』に登場しない神です。しかし忌部氏の文書『古語拾遺』の「天地開闢」の章には、「天地が初めてわかれたとき、天中に御出現になった神の御名を、天御中主神と申し上げる。此の神の御子に三柱の男神があって、長兄を高皇産霊神、次を津速産霊神、次を神皇産霊神と申し上げる」とあり、津速産霊神は天御中主神の子として描かれています。

『古語拾遺』による津速産霊神の系図



古語拾遺ではこの三神は
天御中主神の子としている。

「古語拾遺」による津速産霊神の立場

物部氏の文書『先代旧事本紀』では津速産魂尊と記します。始源の神としての天御中主神の血族が代々の繁栄を重ねるうちに、血族集団の直系と傍系が生ずるようになり、天御中主神の血族から三柱神の血族集団が生じました。三つの血族集団の神々が、高皇産霊神、津速産霊神、神皇産霊神の三柱神であるとされています。

三神の役割の内、高皇産霊神の高は、美称で素晴らしいとか、何と美しいという意味の外に、産霊(結び)なる行為が広大無辺に及ぶとされています。津速産霊神の津速は、迅速とか勇敢を意味します。したがって高皇産霊神の行う役割を手助けし、高皇産霊神の統べる意向を各地の異なる血族集団に伝えるといわれています。また津速産霊神は天兒屋根命の祖父神でもあります。京田辺市では津速産霊神は酒屋神社の祭神として祀られています。

【酒屋神社】

所在地：興戸宮前。祭神は津速魂神^{つはやむすひのかみ}と応神天皇です。
この酒屋神社には仲哀天皇と神功皇后の子である応神天皇にまつわる話が残っています。社伝によれば、神功皇后が朝鮮出兵の際に3個の酒壺を神社の背後の山上に安置し、帰国後、その靈験に感謝して社殿を創立したとあります。

またお酒に関する話として古事記の応神天皇記に「渡来した酒造りの名人・須々許理が大陸の酒の技術を伝えた」とありますが、場所は特定出来ていません。

しかし宮津地区にある佐牙神社に伝わる「本源記」には「仁徳天皇の頃、大陸から酒造りに才のある曾々保理が山背で酒造りに励んだ」と記されています。須々許理の“許”と曾々保理の“保”は朝鮮語では同じ発音から古事記の須々許理と佐牙神社の曾々保理は同一人物だと言われています。

須々許理が応神天皇に自ら造った酒を献上し、その酒をお飲みになった天皇が上機嫌になられたという故事も残っています。余談になりますが、酒の呼称は、古代「さか」、「さが」であり、「さが」は朝鮮語で「発酵する」という意味を持っています。

その他にも河内国の酒造りを業とする「中臣酒屋連」の一族が興戸近辺に来住して酒造りを伝えたとも言われておりますし、飯岡地区には旧墳として「酒屋連友夏の塚」が残っています。このような伝承を元に京田辺市は日本での酒造りの発祥地ではないとも言われています。

創建年代は明らかでないが、式内社で「日本三代実録」の貞観元年（859）正月に従五位下の神位を賜るなど、古来酒造神として朝野の崇敬を得ています。

現在の本殿は明治9年（1876）の再建で、一間社流造、正面に千鳥破風、向拝の前面に軒唐破風を備えています。（宇治の県神社などに見られます）

石鳥居の石柱には「山城国綴喜郡租穀莊興戸村正一位酒屋大明神御宝前」及び弘化三年（1846）願主北尾孫兵衛」とあります。



酒屋神社拝殿



酒屋神社本殿

【神世七代】

別天つ神の次にお成りになった神は、国常立之神^{くにのとこたちのかみ}、豊雲野神^{とよぐもののかみ}、宇比地邇神^{うひぢにのかみ}など以下四神が現れます。合わせて七神の神々を「神世七代」といい、七神の最後に伊耶那岐神、伊耶那美神が現れます。面白い事にこの「神世七代」の三番目・宇比地邇神^{おんなかみ}からは女神とペアとして現れています。

『伊耶那岐命^{いざなぎのみこと}、伊耶那美命^{いざなみのみこと}による国造り、神造り』

5、伊耶那岐命：伊耶那岐命（記）、伊弉諾尊（紀）、伊射奈芸命（丹後風土記）

6、伊耶那美命：伊耶那美命（記）、伊弉冉尊（紀）、伊射奈弥命（出雲風土記）

神世七代の神々

〔〕 夫婦神

国常立之神

〔意富斗能地神〕

豊雲野神

〔大斗乃弁神〕

〔宇比地邇神〕

〔於母陀流神〕

〔須比智邇神〕

〔阿夜詞志古泥神〕

〔角杵神〕

〔伊耶那岐神〕

〔活杵神〕

〔伊耶那美神〕

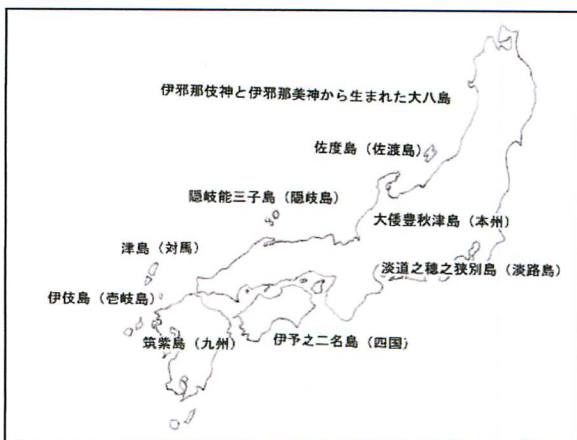
神世七代

日本神話で最も重要で広く知られた神・伊耶那岐命、伊耶那美命が、この「神世七代」の最後に登場します。

伊耶那岐命、伊耶那美命の二神は、「別天つ神」から国造りを命じられ、日本列島の島々を作ります。この章の初めには女性から積極的に声をかけると、その結果は失敗する「水蛭子の話」というのはなはだ男性側の身勝手な話が紹介されています。

伊耶那岐命、伊耶那美命を主神とする神社は全国数多くありますが、京田辺市では伊耶那岐命、伊耶那美命の二神を祭神とする

神社は月読神社のみで、伊耶那岐命単独では天神社、白山神社、西山神社があります。



耶那岐命の国造り

【天神社】

所在地：松井向山。祭神は伊耶那岐命と天照大神^{あまてらすおみかみ}です。

延喜式神名帳に記載されている式内社です。創祀の年代は明らかではないが、延暦6年（787年）に桓武天皇が天帝を交野柏原にま17、天神社①つったことが「続日本紀」にみえます。

現在の地に移された年代はあきらかではないが、松井地区を氏子として産土^{うぶすま}神^{なかつみ}として崇敬されています。本殿は二間社流造、桧皮葺であります。



天神社①



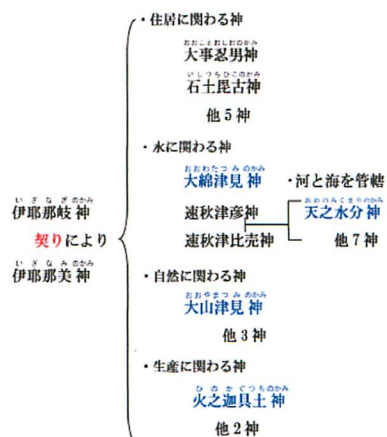
天神社②

国造りを終えた伊耶那岐命^{いざなぎのみこと}、伊耶那美命^{いざなみのみこと}の二神は、次に神造りを行いました。この章の神造りは、「夫婦神の契」^{ちぎ}「禊祓」^{みそぎ}「誓約」^{うけい}によって誕生します。

【契りによりうまれた神々】

「住まいに関わる神」として大事忍男神^{おおことおしのかみ} 以下6神、「水に関わる神」として大綿津見神^{おおわたつみのかみ} 以下2神、「自然に関わる神」として大山津見神^{おおよまつみのかみ} 以下3神、「生産に関わる神」として火之迦具土神^{ひのかぐつちのかみ} 以下2神が誕生しました。この神々の中で特に大事な神は、海の神・大綿津見神と、山の神・大山津見神、そして火の神・火之迦具土神でしょう。初代神武天皇は海の神である大綿津見神と、山の神である大山津見神の血を引く子孫と婚姻する事により日本国土の長として登場するからです。

伊耶那岐神、伊耶那美神の「契り」により生まれた神々



「契り」により生まれた神々

7、大綿津見神おおわたつみのかみ：(大綿津見神、綿津見神)(記)、海神・少童命(紀)、

大綿津見命は伊耶那岐命、伊耶那美命の「契り」により生まれ、「水に関わる神様」です。

ワタツミとは海の霊を意味します。ワタの語源はさだかではないが、うみ、うなばらなどは自然としての海を想起させるのに対し、霊的なものの住家としての海を意味するようです。特に大綿津見神は海底の宮殿に住み、海の幸また農業の水を支配する神です。

記紀にはく海幸・山幸の話>に登場する神です。兄の海幸彦に借りた釣針を失った山幸彦が針を求めて訪れたのが綿津見の宮です。

又大綿津見神の姉娘・豊玉毘売は山幸彦と夫婦になり、鵜葺草葺不合命うけふきあへずのみこと(神武天皇の父)を産みますが、間もなく亡くなります。そこで妹・玉依毘売が鵜葺草葺不合命の育児にあたります。

京田辺市には大綿津見神をまつる神社は有りません。

8、天之水分神あめのみくまりのかみ(速秋津彦神の子)：天之水分神(記)

日本神話では、神産みの段で「水に関わる神」として速秋津彦神はやあきつひこのかみ、速秋津比売神はやあきつひめのかみ両神がおられますが、この神様の子として天水分神、国水分神が登場します。水にかかわる神ということで祈雨の対象ともされ、また、田の神や、水源地に祀られるものは山の神とも結びつきました。「みくまり」の「くまり」は「配り(くばり)」の意で、水源地や水路の分水点などに祀られます。後に、「みくまり」が「みこもり(御子守)」と解され、子供の守護神、子授け・安産の神としても信仰されるようになりました。

京田辺市では天之水分神を祭神とする神社に水分神社と天神社の摂社にあります。



水に関わる神々

[水分神社]

所在地：東鍵田。祭神は天之水分神、応神天皇、菅原道真です。水分神社の起源は、その昔、この地に鎮座していた「龍五社」と称する神社にはじまります。詳細な歴史は不明ですが、大徳寺の旧記によると、文政13(1830年)に龍王社として、鎮座された。"治水の神"として近隣からの崇敬を集めていたといわれています。

1895年(明治28年)八幡社と天満宮を合祀した際、社名を「水分神社」と改め、以後、氏神として村民から信仰を集めてきました。

現在の社殿は、1971年(昭和46年)4月に造営・改築されたものだそうで、水分神社の鎮座する東区共有地を田辺町立田辺東小学校用地として提供した代価にて、本殿の改築、拝殿の新築、鳥居や境内の整備をしました。



水分神社①

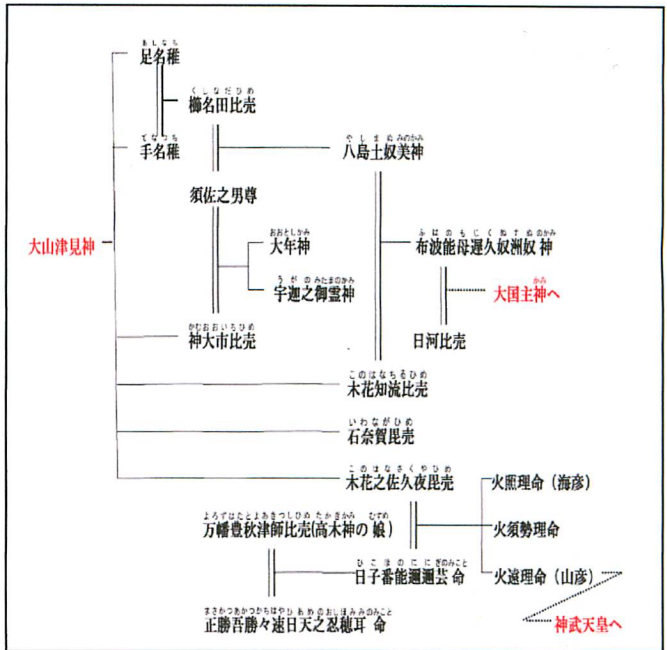


水分神社

9、^{おおやまつのみかみ}大山津見神：大山津見神(記)、大山祇神(紀)
大山津見神自身についての記述はあまりなく、
大山津見神の子と名乗る神が何度か登場します。

- ①：<^{やまたのおろち}八俣大蛇退治>の項には、須佐之男命の妻となる櫛名田比売の父母(^{あしなつちのみこと}足名椎命、手名椎命)として登場する。
- ②：須佐之男命の系譜において、大山津見神の娘である神大市比売神との子に、大年神と宇迦之御霊神をもうけています。
- ③：櫛名田比売と須佐之男命の子・^{やしまじぬみのかみ}八嶋土奴美神は、大山津見神の娘の^{このはなちるひめ}木花知流姫と結婚し、布波能母遅久奴須奴神が生まれます。その後四代目に大国主命が誕生します。
- ④：天孫降臨の後、瓊瓊杵尊は大山津見神の娘である^{このはなのさくやひめ}木花之開耶姫と出逢い、大山津見神は木花之開耶姫とその姉の石長比売を差し出しましたが、瓊瓊杵尊は容姿が醜い磐長姫だけを送り返すと、大山津見神はそれを怒り、「石長比売を添えたのは、天孫が岩のように永遠でいられるようにと誓約を立てたからで、石長比売を送り返したことで天孫の寿命は短くなるだろう」と告げました。

京田辺市では大山津見神を祀る神社は地祇神社のみです。



大山津見神の家族たち

瓊瓊杵尊は容姿が醜い磐長姫だけを送り返すと、大山津見神はそれを怒り、「石長比売を添えたのは、天孫が岩のように永遠でいられるようにと誓約を立てたからで、石長比売を送り返したことで天孫の寿命は短くなるだろう」と告げました。

[地祇神社] 23、大山津見神の家族たち

所在地：普賢寺下大門。延喜式内社、『山城国綴喜郡地祇神社』とあります。

江戸時代には、当社本来の祭神が祀られており、それが未だに続いているようですが、式内社調査報告は、「現在の祭神、^{おきながたらしひめ}活気長足比売(神功皇后)・大国主命・大山祇命」としています。観音寺本堂の左手に小ぶりの鳥居が立ち、石段を登った所、山頂を切り開いた狭い境内に、簡単な覆屋の中に本殿(三間社流造・板葺、桁行三間・梁一間)が東面して鎮座しています。

社殿・境内ともに古びていて、祭祀がおこなわれている形跡はみえません。



地祇神社

10、^{うかのみたまのかみ}宇迦之御魂神：宇迦之御魂神(記)、倉稻魂命(紀)、

この神は大山津見神の娘・神大市比売神と須佐之男命との子で、稲の霊とされます。全国の伏見稻荷神社の祭神でもあります。京田辺市では宇迦之御霊神を祭神とする神社は昨岡神社です。

[昨岡神社]

所在地：飯岡東原と草内宮の後。京田辺には飯岡と草内の二箇所の昨岡神社があります。元は木津川と普賢寺川の合流地点・宮が森にあったのが、木津川の氾濫で江戸時代中期(元禄年間)にこの二か所に分けて移されました。

祭神は宇賀乃御魂神(稲倉魂、草内のはこちらの表記)と菅原道真です。江戸時代には両社とも「天神、天満宮」と呼ばれ菅原道真が祭神に加えられたのも、道真が雷、つまり農業と関わる神であることから^{うなず}額けます。また、全国に点在する稲荷大社の主祭神で、農耕・商工業、もちろん商売繁盛の神として今なお多くの参拝者の途絶えることがありません。

飯岡の昨岡神社の本殿は一間社流造り、銅板葺き。一方草内の方は一間社春日造り、檜皮葺、唐破風をつけ各所に蔓股や紅梁絵様を配するなど装飾が多く、江戸中期の華やかな風情を残していて、京都府の登録文化財に指定されています。

両社とも神社の廻りは神聖な森の佇まいが残っています。飯岡の昨岡神社には、平成3年(1191)、「京都の自然200選」に登録された巨木スタジイはじめ椎など大きな樹木に囲まれ、昼間も暗く森閑として厳かな雰囲気があります。草内の方は山城国一揆の舞台となった草路城の土塁や堀も残っていて府の「文化財環境保全地区」に指定されています。

《万葉歌碑》：飯岡の昨岡神社には京田辺唯一の万葉歌碑があります。

「春草を馬昨山ゆ越え来なる 雁の使いは宿り過ぐなり」
旅の途上、故郷から何の便りもない寂しさを、どこから飯岡を越えて飛んできた雁を見て詠んだ歌です。対岸の井手から城陽にかけての古道には多くの万葉歌が残されているのに、何故か京田辺市内に1つしかないのが不思議です。



昨岡神社拝殿



昨岡神社本殿



昨岡神社スタジイ



昨岡神社万葉歌碑

11、火之迦具土神^{ひのかぐつちのかみ}：火之迦具土神(記)、火軻遇突智(紀)

伊耶那美神^{いざなみのかみ}は「契り」で生まれた最後の神として火の神・火之迦具土神をお生みになった後、「みほと焼かれて病み臥やせり」とあり病氣になってしまいます。

名前の「ひのかぐ」は「火がほのかに燃える」という意味があります。竹取物語の「かぐや姫」の「かぐ」は「ほのかに光る竹」と同じ意味です。

火之迦具土神は朱智神社の摂社に祭られています。

12、^{とようけひめのかみ}豊宇気毗売神：豊宇気比売神(記)、
^{いざなみのかみ}伊耶那美神が病床に伏している間、嘔吐や尿、便など
 から6神ができます。中でも尿から生まれた^{わくもすひ}和久産巢日
^{のかみ}神は生命を司る神で、この神の子に豊宇気毗売神がおら
 れます。伊耶那美神は亡くなった後、黄泉国へ行かれます。
 豊宇気毗売神の名義は「豊かな立派な食べ物(稲穂)の神」
 稲という限定的な食べ物の神です。伊勢神宮の外宮の祭神
 でもあり、天照大御神の食べ物を司っています。先に述べ
 た^{おほげつのひめ}大宜都比売も食べ物の神ですが、一般的な食物の神です。
 京田辺市内では豊宇気毗売神を祭神とする神社に笠上神社
 があります。

火の神「火之迦具土神」を産んだ事に
 より伊耶那美神は病となる

伊耶那美神の

嘔吐から ^{かむかむこのかみ}金山毘古神(鉾山の神)
 糞から ^{はにこすひこのかみ}波邇夜須毘古神(土の神)
^{はにこすひこのかみ}波邇夜須毘売神
 尿から ^{みつはののかみ}弥都波野売神
^{わくもすひ}和久産巢日神(生命の神)——^{とようけひめのかみ}豊受毘売神

伊耶那美神の病から化成した神々

[笠上神社]

所在地：高船里。祭神は豊宇気毗売神です。高船の山中にある小さな社です。
 神社の創建は不明ですが、現在の本殿は昭和の初期、篤志家によって再建されました。
 本殿は一間社流造、銅板葺きで覆屋に囲まれています。また笠上神社は、別名「瘡神社」
 ともいわれ、瘡を患う人の平癒祈願の信仰の神社でもあります。参道の石段を登ると、
 いろは紅葉の隙間から南山城、奈良方面京田辺の街が一望できる景勝地でもあります。



笠上神社



笠上神社本殿

《^{ひのかぐつちのかみ}火之迦具土神から化成した神々》

^{いざなみのかみ}伊耶那美神は^{いざなみのかみ}伊耶那美神が亡くなったのは^{ひのかぐつちのかみ}火之迦具土神
 のせいだとして十拳劔を抜いて^{ひのかぐつちのかみ}火之迦具土神を切ってしま
 いました。その時、その血液や頭部、手足、胸等から16神が
 化成します。

中でも首を切り落とした際、十拳劔(^{あめのおはばり}天之尾羽張ともいう)の
 根元についた血が岩に飛び散って化成した神が^{みかはやひのかみ}甕速日神、
^{ひはやひのかみ}桶速日神、^{たけみかづちのかみ}建御雷之男神の三柱です。

伊耶那美神の十拳劔で殺された

火之迦具土神から化成した神々

火之迦具土神の

頭部から ^{まきかちまつみのかみ} 正鹿山津見神	右足から ^{みぎあしのみのかみ} 戸山津見神
右腕から ^{みぎうでのみのかみ} 羽山津見神	左足から ^{ひだりあしのみのかみ} 原山津見神
左腕から ^{ひだりうでのみのかみ} 志芸山津見神	陰部から ^{くろやまつみのかみ} 闇山津見神
胸部から ^{おどやまつみのかみ} 淤勝山津見神	腹部から ^{おくやまつみのかみ} 奥山津見神
腹部から ^{おくやまつみのかみ} 奥山津見神	
血液から ^{たけみかづちのかみ} 建御雷之男神 他6神	

^{ひのかぐつちのかみ}火之迦具土神から化成した神々

13、^{たてみかづちのおかみ}建御雷之男神：建御雷之男神・建御雷神(記)、武甕槌神・武甕雷男神(紀)

火之迦具土神の血から化成した建御雷之男神は、雷神、剣の神、相撲の元祖ともされる神です。古事記には「出雲の国譲り」と「神武天皇東征」に登場します。

①：＜出雲の国譲り＞の項では、天照大御神の命をうけた建御雷之男神は、出雲の伊耶佐の小浜に降り立って^{とつかのつるぎ}十拳劔を砂に突き立て、大国主に国譲りをせまります。最後まで従わなかった大国主命の子・^{たけみなかたのかみ}建御名方神との力比べを行い、建御名方神は敗北します。結局、大国主命は自分の征服に役立てた広矛を献上して恭順の意を示します。その代わり天つ神は、国を皇孫に任せる見返りに、立派な宮を住まいとして建てると約束しました。

②：＜神武東征＞の項では、建御雷の剣が、熊野で手こずっていた神武天皇を助けます。和歌山の熊野にさしかがった際、熊が出現したため(『古事記』)あるいは毒気(『日本書紀』)によって、神武も全軍も気を失うか、力が萎えきっていましたが、建御雷之男神の計いで、高倉下が献上した剣を持ち寄ると天皇は目をさまし、熊野の悪神たちをことごとく切り伏せることができました。神武が事情を訪ねると、高倉下の夢枕に天照大御神や高御産巢日神(高木神)の神々が現れ、かつて葦原中国の平定の経験ある建御雷之男神にいまいちど降臨して手助けせよと命じられたが、建御雷は、自分の剣をさすければ事は成ると言い、高倉下の倉に穴をあけてねじこみ、神武のところへ運んで貢がせたのだというのでした。

京田辺市には建御雷之男神を祭神とする神社は朱智神社の摂社にあります。

【^{みそぎ}禊祓によつて化成した神々】

亡くなった伊耶那美神は出雲の国と^{ほうき}伯伎の国との堺の比婆の山に葬られました。

伊耶那岐神は伊耶那美神のいる^{よみ}黄泉の国に会いに行きますが、伊耶那美神との約束を^{たがえ}違え、黄泉の国へ引きづられそうになり、辛うじて逃げてきました。

そして^{つくし}竺紫の^{あはきばら}阿波岐原にて「禊祓」を行いました。

「禊祓」は水の中に入り、身を清める儀式です。

この時、身に着けていた装飾品や着物、あるいは垢などから 26 神が化成しました。

伊耶那美神の「禊祓」

杖から ^{つゑ} 衡立船戸神	右手の腕輪から ^{へだるのたま} 辺祿神 他 2 神
帯から ^{おび} 道之長乳齒神	垢から ^{かみ} 八十櫛津日神 他 1 神
囊から ^{ふくろ} 時量神	穢から ^{けがれ} 神直毘神 他 2 神
衣から ^{ころも} 和豆良比能宇斯神	滌から ^{すすぎ} 底津綿津見神 他 5 神
禪から ^{ぜん} 道候神	右目から ^{みぎめ} 月読命
冠から ^{かん} 魍咋之宇斯神	鼻から ^{はな} 建速須佐之男命
左手腕輪から ^{ひだりでうでわ} 奥祿神 他 2 神	左目から ^{ひだりめ} 天照大御神

伊耶那美神の禊祓により化成した神々

《三貴子の誕生》

特に左目を洗った事により天照大御神、右目を洗った事により月読命、鼻を洗った事により建速須佐之男命が誕生しました。特にこの三神を「三貴子」といいます。

^{いざなぎのかみ}伊耶那岐神「あは子生み生みて、生みの終に三柱の貴き子得たり」と大変喜ばれ、天照大御神には高天の原を治めよ、月読命には夜を治めよ、須佐之男命には海原を治めよと命じました。

三貴子の役割分担

^{あまてらすおおかみ} 天照大御神：	高天原を治めよ
^{つきよみのみこと} 月読命：	夜の世界を治めよ
^{すさのおののみこと} 須佐之男命：	海原を治めよ
(しかし須佐之男命は母の国根の堅洲の国(黄泉の国)を希望する。)	

、三貴子の役割分担

14、天照大御神：天照大御神・天照大神(記)、大日靈貴・天照大日靈尊(紀)

「天にあって、照り輝く偉大な神々しい神」という意味。

天岩戸の神隠れで有名であり、記紀によれば太陽を神格化した神であり、皇室の祖神（皇祖神）の一柱とされる。信仰の対象、土地の祭神とされる場所は伊勢神宮が特に有名です。

天照大御神が古事記に登場する場面は幾度もあります。

- ①：伊耶那岐神から＜御頸珠＞^{みくびたま}を受け取り、高天原の領有を命ぜられます。
- ②：＜須佐之男命の昇天＞の項では高天原の主宰神として、弟須佐之男命と対決します。
- ③：＜天の安の河の誓約＞では、須佐之男命と三女五男神を生み合います。そして天照大御神の玉から化成した五男^いを大御神の子だと宣言します。これは高天原の象徴としての玉に絶対性があり、そこから生まれた者だけが王権の保持者である事の宣言でした。
- ④：＜天照大御神の天の石屋戸ごもり＞の項では、須佐之男命の乱暴によって服織女が殺され、これを見て大御神は天の石屋戸に隠れてしまいます。この事は大御神が太陽神である事から、太陽が最も衰える冬至を以って、太陽神の死と考えた事の表象と考えられます。
- ⑤：＜須佐之男命から「草なぎの太刀」を献上される＞の項では王権の三種の神器である剣を受け取る事により、豊葦原の水穂の国は、息子天忍穗耳命の領有支配する国との神勅を下します。



天石屋戸ごもり

- ⑥：＜大国主神の国譲り＞の項では、大国主神が国譲りをしたので、天忍穗耳命に代えて^{ににぎのみこと}邇邇芸命を降臨させます。
- ⑦：＜神武天皇東征＞の項には、神武天皇が熊野で毒氣に倒れた時、高倉下^{たかくらし}を介して神劍(布都の御霊)を下ろして危機を救います。

京田辺市では天照大御神を祭神とする神社は、天神社、神南備神社があります。

天岩屋戸伝説に登場する神々

- 思金神^{おもかねのかみ}：前後作を考える。
天孫降臨の際、鏡を持つ。
伊斯許理度売命^{いすこしりどるい}：鏡造りの祖
玉祖命^{たまのすけのみこと}：八尺の勾玉を作る。
天児屋命^{あまのこやのみこと}：祝詞をあげる。中臣氏の祖。
天宇受売命^{あめのうすわいのめこと}：神懸りの舞。沙女氏の祖。
布刀玉命^{ふとうたまのみこと}：造られた珠を幣帛として祀る。
天手力男神^{あめのぢからのかみ}：相撲の神

天石屋戸伝説に登場する神々

15、月読命：月読命(記)、月読尊・月夜見尊・月弓尊(紀)

月読命は伊那岐岐命の「禊」により右目から生まれた神であり、夜の国を治めるように命じられました。名義は「月齢を数えること」、特に夜の天体を見ながら航海する海洋民族の守護神であります。

古事記では、夜の世界の領有支配者となり、これ以上の記載はありませんが、「神代紀」では、^{うけちち}保食神を殺害する神として登場します。そこで天照大御神の不興を買って、日神と月神は別々に住むようになったといわれています。(古事記の食物の神殺しは須佐乃男命の仕業となっています。)

[月読神社]

所在地：大住池平。神社の祭神は月読命、伊邪那岐命及び伊邪那美命です。創建年代は不詳。ただし、延喜年間（901年～922年）に編纂された延喜式内社で、大社に位置付けられている綴喜地方の中で最も古い神社と考えられます。中世にはたびたび兵乱、兵火を受けて、社殿の焼失と再興を繰り返した歴史があります。鎌倉時代初めに、源頼朝から神馬の献上があったとも伝えられています。明治維新の時には、鳥羽伏見の戦いを避けるため、石清水八幡宮が一時遷座され、ご神宝が薬師堂に安置されました。現在の本殿は、東に面する一間社春日造、銅板葺（もとは桧皮葺）の建物です。明治26年（1893年）に名古屋の伊藤平左衛門により設計されました。本殿を囲む瑞垣の正面に、鳥居を配置する珍しい構造が見られます。この春日造は奈良の春日大社本殿の形式で、この様式は、奈良を中心に京都府南部、大阪府、和歌山県北部などに広く分布します。

神宮寺として、宝生山福養寺が明治の初めごろまで存在し奥ノ坊、新坊、中ノ坊、西ノ坊、北ノ坊、東ノ坊の六坊が備わっていたが、すべて廃寺となっています。毎年10月14日の宵宮には大住隼人舞（市指定文化財）が奉納されます。



月読神社



月読神社本殿



隼人舞

16、建速須佐之男命：建速須佐之男命・速須佐之男命・須佐之男命・須佐能男命(記)

速素戔男尊・素戔鳴尊(紀)

名の「須佐」は「すさぶる=荒ぶる」の意で、[勇猛で激しく進む神]。

建速須佐之男命が古事記に登場する場面は以下の通りです。

- ①：伊邪那岐命が黄泉の国から帰還し、日向の阿波岐原で「禊ぎ」を行った際、鼻を洗った時に生まれます。そして伊邪那岐命から与えられた役割は、夜の食国^{おすくに}または海原を治めるように言われました。建速須佐之男命はそれを断り、母の神伊邪那美のいる根之堅洲国に行きたいと願い、伊邪那岐の怒りを買って追放されてしまいます。

そこで建速須佐之男命は母の故地、出雲と伯耆の堺近辺の根の国へ向う前に姉の天照大神に別れの挨拶をしようと高天原へ上るが、天照大神は彼が高天原に攻め入って来たのではと考えて武装して彼に应对し、彼は疑いを解くために誓約を行います。

- ②：誓約によって潔白であることが証明されたとして建速須佐之男命は高天原に滞在するが「天の服織女を殺す」等の乱暴を働いたので、天照大神は天の岩屋に隠れてしまいました。そのため、彼は高天原を追放されます（神逐）。

③：高天原を追放された須佐之男命が地上に降り立つ前に腹ごしらえしようと大気都比売神のもとへ立ち寄ったとき、鼻や口、さらには尻などから色々な食材を取り出し、調理してもてなしたのですが、その様子を見てしまった須佐之男命は、穢れた食べ物を出されたと勘違いして、怒って大気都比売神を殺してしまいます。するとその遺体から蚕や稲・粟・麦・大豆・小豆が生まれました。そこに神産巢日神があらわれ、須佐之男命にこれら五穀の種と蚕を葦原中国へもっていくよう命じるのでした。

大気都比売神から化成した物

頭から	蚕
目から	稲の種
耳から	粟
鼻から	小豆
陰部から	麦
尻から	大豆

大気都比売神のから化成した神々

④：出雲の鳥髪山（現在の船通山）へ降った建速須佐之男命は、その地を荒らしていた巨大な怪物八岐大蛇（八俣遠呂智）への生贄にされそうになっていた少女櫛名田比売と出会います。

⑤：建速須佐之男命は、櫛名田比売の姿形を歯の多い櫛に変えて髪に挿し、八俣遠呂智を退治します。そして八俣遠呂智の尾から出てきた草那芸之大刀を天照御大神に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなります（現在は、愛知県名古屋市の熱田神宮の御神体となっています）。その後、櫛から元に戻した櫛名田比売を妻として、出雲の根之堅洲国にある須賀（すが）の地（山陰地方にある島根県安来市）へ行きそこに留まりました。

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐

都麻基微爾 夜幣賀岐都久流

曾能夜幣賀岐袁（古事記）

八雲立つ…日本最初の和歌

そこで、八雲立つ 出雲八重垣

妻籠に 八重垣作る その八重垣に

と詠みました。これは日本初の和歌とされます。

⑥：大国主の神話において根の国の須佐之男命の元にやってきた葦原色許男神（大国主命）は、須佐之男命の娘である須世理比売を妻にしたいと思うが、須佐之男命は葦原色許男神に様々な試練を与えます。葦原色許男神は須世理比売の助けを得ながらそれらを克服したので、須佐之男命は葦原色許男神に、須世理比売を妻とすることを認め大国主という名を贈りました。京田辺市では建速須佐之男命を祭神とする神社に、須賀神社、朱智神社、水分神社、新宮社があります。

【新宮社】

所在地：多々羅新宮前。祭神は素盞鳴命です。

この地は欽明天皇の御代、わが国に来朝した百済国人爾利久牟王^{にりくむ}の住居したところといわれています。この人は鉄工の業を伝えた人で朝廷より多々羅の姓を下賜されました。当社はその子孫のものが祖神と仰ぐ百済国余璋王を祭神として祀った氏神社であって、当時帰化人がこの地に多く住んでいたことが察せられます。現在、朱智神社の式外社となしましたが、由緒は古いものです。

もとの鎮座地は明らかでないが、一説に多々羅田中山にあり、田中山宮と称しました。



新宮社参道



新宮社本殿

【誓約により出来た神々】

伊耶那岐神から海原を治めよと命じられた須佐之男命は母の国・根の堅洲国^{ねのかたすのくに}（黄泉の国）に行きたいと命令に従いません。最後には伊耶那岐神に許されますが、天照大御神の信任を得られず、証しとして「誓約」を行います。

「誓約」とは、あらかじめ神に誓約した通りの結果が現れるかどうかで、神意を占う事で、古代の占いと言ふべきものです。まづ天照大御神は、須佐之男命の十拳劔^{とつかのつるぎ}を受け取り、その劔から 3 人の女神(多紀理毘売命^{たきりひめのみこと}、市寸嶋比売命^{いちさしまひめのみこと}、多岐都比売命^{たきつひめのみこと})をお造りになりました。

須佐之男命は天照大御神の身に着けていた装飾品から 5 神をお造りになりました。中でも天照大御神の左の角髪に巻かれた八尺の珠から生まれた正勝吾勝々速日天之忍穗耳命^{まさかつあかつかはやひあめののおしほみみのみこと}は天孫降臨する邇邇芸命の父神です。

- 17、多紀理毘売命^{たきりひめのみこと}：多紀理毘売命・田寸津比売命(記)、田霧姫命・田心姫(紀)
- 18、市寸嶋比売命^{いちさしまひめのみこと}：市寸嶋比売命(記)、市杵嶋姫命(紀)
- 19、多岐都比売命^{たきつひめのみこと}：多岐都比売命・田寸津比売命(記)、湍津姫命・湍津姫(紀州)

多紀理毘売命は誓約によって生まれた三女神の内、1 番目の女神で別名奥津嶋比売命といわれています。神名の「たきり」は海上の霧とも、「滾(たぎ)り」(水が激しく流れる)の意で天の安河の早瀬とも解釈されます。大国主命との間に阿遲鉏高日子根神^{あぢすたかひこねのみこと}と下照姫を生んだと記されています。

この三女神(多紀理毘売命、市寸嶋比売命、多岐都比売命)は単独で祀る神社は少なく、宗像三女神として各地の宗像神社・厳島神社など祭られています。

須佐之男尊の十拳劔から	
多紀理毘売命 市寸嶋比売命 多岐都比売命	(以上三神は福岡宗像神社の祭神)
天照大御神の	
八尺の玉から	正勝吾勝々速日天之忍穗耳命 (邇邇芸命の父)
右の美豆良の珠	天之菩卑命 (天孫降臨の第一使者)
御髪 ^{みかみ} の珠から	天津日子根命 (雨乞いの神)
左手の珠から	活津日子根命
右手の珠から	熊野久須毘命

誓約による神々の誕生

市寸嶋比売命は二番目の女神で、神霊の依り憑く女神です。別名狭依理比売命さよりひめのみことといいます。

多岐都比売命は三番目の女神で、「滝」のような激流の神という意味があります。

京田辺市には上記三女神を祭神としている厳島社があります。



京都市御苑内宗像神社

[厳島社]

所在地：薪東沢。三女神を祭神とします。社殿には弁財天と宇賀神像が安置されている。弁財天の背面には元禄十六年(1703年)六月十七日、片山村の片山源五郎尉の作である事が記されています。又、宇賀神像は弘法大師作と伝えられ、酬恩庵二十五世住職宗淵が寄付したものです。明治時代の記録には厳嶋社と記されていました。



京田辺厳島社

20、まさかつあかつかはひ あめ の おしほみ の みこと 正勝吾勝々速日天之忍穗耳命：正勝吾勝々速日天之忍穗耳命(記)

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊・正哉吾勝々速日天忍骨尊(紀)

誓約により、天照大御神の左の角髪みずらに巻いた八坂の珠から化成した五男神の第一子です。この八坂の珠が皇位継承の証となります。天孫降臨した邇邇芸命の父神です。

<葦原の中つ国のことむけ>の項に登場します。天照大御神は「豊葦原の千秋の水穂の国は、あが御子正勝吾勝々速日天之忍穗耳命の知らす国ぞ」と命を下します。そこで日天之忍穗耳命は、八百万の神々の賛同を得て、子の邇邇芸命のを遣わす事になりました。

天孫降臨に登場する神々

おもひの神
思金神：前後作を考える。鏡を持つ。

いさかみり度売命
伊斯許理度売命：鏡造りの祖

たかひ 玉祖命
玉祖命：八尺の勾玉を作る。

あめのみこ
天兒屋命：祝詞をあげる。中臣氏の祖。

あめのみこ
天宇受売命：神懸りの舞。沙女氏の祖。

あめのみこ
布刀玉命：造られた珠を幣帛として祀る。

あめのみこ
天手力男神：相摸の神。

あめのみこ
天石門別神：石屋戸を神各化した神。

天孫降臨に随伴した神々

21、あめ の ほ ひ の みこと 天之菩卑能命・天菩比命・天菩比神(記)、天穗日命(紀)、

誓約により、天照大御神の左の角髪みずらに巻いた珠から化成した五男神の第二子です。1番目に葦原の中つ国へ遣わされた天之菩卑命あめ の ほ ひ の みことは大国主命に媚び諂って3年たっても帰ってきませんでした。

22、あまつひ こ れ の みこと 天津日子根命(記)、天津彦根命(紀)、

誓約により、天照大御神の左の御纒みきりに巻いた珠から化成した五男神の第三子。誕生後、古事記には、登場していません。『古事記』では天津日子根命、『日本書紀』では天津彦根命と書かれます。天津日子根命は多くの氏族の祖神とされている。『古事記』によれば、河内国造・額田部湯坐連・茨城国造・大和田中直・山城国造・馬来田国造・道尻岐閉国造・周防国造・大和滝知造・高市県主・蒲生稻寸・三枝部造らの祖神となっています。京田辺には天津日子根命を祭事とする人事は、薪神社です。

[新神社]

所在地：薪里の内。天津彦根命と応神天皇を祭神としています
本殿は一間社流造、柿葺（こけらぶき）であります。

創建年代は不詳。天正年間（1573～1592 年）に再興されました。1907 年、同地区にあった八幡宮と天神社を合併して薪神社となりました。境内には、もと甘南備山頂にあった月読神が依りついたと伝えられる^{ようこういし}影向石が祀られています。



薪神社

《天の石屋戸伝説》

既に述べたように、須佐之男命は三人の女神を作る事により、天照大御神より勝ったと慢心し、乱暴狼藉を働きます。これを見た天照大御神は天の石屋戸を開き、その中にお隠れになりました。これが御存じの天の石屋戸伝説ですが、この事件では沢山の神々が登場します。これらの神々は、後に^{ににぎのみこと}邇邇芸命の天孫降臨の際にお伴する神々です。

^{あめのこやねのみこと}天児屋命、^{あめのうすめのみこと}天宇受売命、^{あめのたちからをのみこと}天手力男神等々の神々の力により、天照大御神は天の石屋戸からお出になり、須佐之男命を高天の原から追放するのです。

《須佐之男命・出雲の建国》

追放された須佐之男命は出雲の国へ行き、^{やまた}八俣の大蛇を退治し、^{おろち}大山津見神の孫にあたる^{くしなだひめ}櫛名田比売と夫婦となり、出雲の国を作ります。この須佐之男命と^{くしなだひめ}櫛名田比売夫婦から数えて六代孫に大国主命が登場します。

《大国主命の国造り》

23、大国主命：別名、大物主神、国作大己貴命、^{あしはらしこを}葦原醜男、

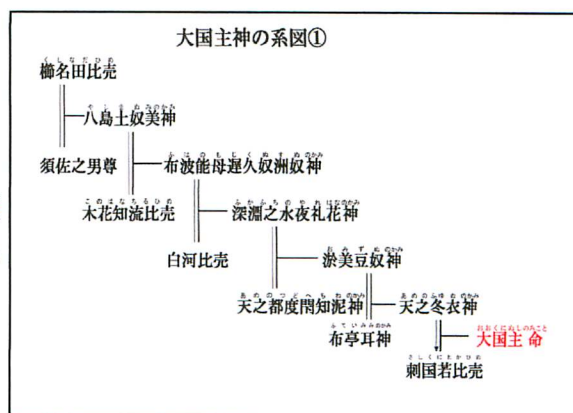
大国主神は須佐之男命の六世の子孫、^{あめのふゆきぬのかみ}天之冬衣神と^{さしくにわかひめ}刺国若比売との間に生まれた神で、「大穴牟遲神、葦原の色許男神、八千鉾神、宇都志国玉神」等、5つの別名を持っています。

古事記における大国主命が登場する神話を挙げると

- ①：因幡の素兎を助け、八上比売と結婚する話。
- ②：兄弟である八十神の迫害による受難の話。
- ③：根の国訪問と須佐之男命による試練の後、須勢理毗売と結婚の話。
- ④：高志国の沼河比売と結婚し、建御名方神を生む話。
- ⑤：少名毘古那神の協力を得て、国造りをする話。
- ⑥：大国主神の国譲りの話。

等々に出てきます。

京田辺市には大国主神を祭神とする神社は須賀神社、地祇神社、甘南備神社、石船神社等があります。



大国主神の系図を

[須賀神社]

所在地：打田宮本。京田辺の最南部、標高200mの内田地区に位置するこの神社の本殿は、銅板葺・一間社流造り、正面の木鼻は猿、桁隠しには菊花の彫刻が施され、府の登録文化財となっています。高欄の擬宝珠に「安永5年(1776)」の銘が残されています。能舞台を備えた境内からの眺望は素晴らしく、そこに立つと清々しい風が吹き抜けます。(お月見の名所でもあるとか)。「清々しい」といえば、高天原を追放された須佐之男命が葦原中国で見事八岐大蛇を切り倒し、めでたく櫛名田比売と結ばれて、宮を造るにあたり、「吾此地に来て、我が御心すがすがし」と言われたことから『須賀(我)神社』と名付けられたという話が思い起こされます。

ここ須賀神社の祭神は、大国主命のほかに須佐之男命、猿田彦尊が祀られています。須佐之男命が祀られていることから、明治以前までは「天王社」と呼ばれていました。古記に「普賢寺郷の牛頭天王社(現・朱智神社)に遠いので内田村にも天王社を造った」と記されています。「牛頭天王」とは須佐之男命の本地、どちらも疫病神とみられています。

また摂社には高御産巢日神、神産巢日神、天児屋命が祀られています。



須賀神社①



須賀神社本殿

24、^{すくなひこなのかみ}少名毘古那神：少名毘古那神(記)、少彦名命(紀)

古事記では少名毘古那神は神産巢日神の子とされ、神産巢日神の指の間からこぼれ落ちたといわれています。

日本書紀では高皇産靈神の子とされています。後の一寸法師のモデルとなった神です。京田辺市には少名毘古那神を祭神とする神社に御霊神社があります。



一寸法師

[御霊神社]

所在地：大住大嘗料。無格社の神社です。古代収穫を神社の祭事、造営などの諸経費に充てるために設定された神田に祭られた神社です。本来は御料社と呼ばれるべきなのですが、後に御霊社と誤って伝わり、それゆえ怨霊を鎮める神とされました。

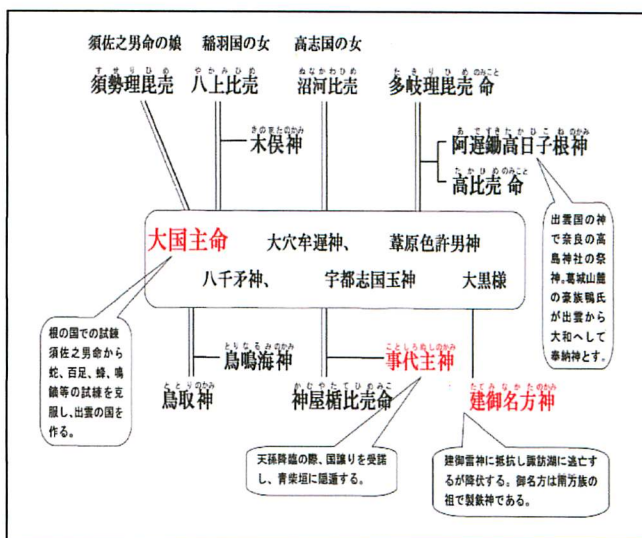


御霊神社

《大国主命の国譲り》

さて高天原の天照大御神は八百万の神を集めて相談しました。「この葦原の中つ国は、我が子が支配する国なので、国を受け取りに行くのに、どの神を遣わしたらよいか」と問いました。八百万神は「**天之菩卑命**がよろしい」と答え、使者にたてましたが、**天之菩卑命**は大国主命に媚び付きて3年たっても復命しませんでした。そのため第二使者として天の若日子が使者となりましたが、この神も8年たっても復命しません。その後色々の神を遣わしますが失敗に終わり、最終的に**火之迦具土神**の血から生まれた**建御雷之男神**を派遣し、

大国主命の息子・**事代主神**から国を譲渡されます。この時、**事代主神**と兄弟神・**建御名方神**が対抗しますが、力負けをして諏訪の地まで逃げた事が述べられています。



大国主命の家族

25、事代主神：事代主神(記、紀)、

大国主命と神屋橋比売命との間に生まれた神です。「事代」とは「神の言葉を受け、その神の代わりに託宣する神」の事です。大国主命の国譲りに際して、大国主命は高天原からの使者に対し、「事代主神が伝える」として、事代主神に一任し、事代主神は国譲りを託宣します。託宣神のほか、国譲り神話では釣りをしていたことから釣り好きとされ、海と関係の深い「えびす」と同一視されて、海の神や商業の神としても信仰されています。七福神の中のえびすが大鯛を小脇に抱え釣竿を持っているのは、国譲り神話におけるこのエピソードによるものです。

京田辺市には事代主神を主祭神とする神社に石船神社があります。

「石船神社」

所在地：高船里。祭神は**大国主命**、**事代主命**、**饒速日命**です。

創建ははっきりしないが、物部氏の降臨神話を伝えています。「伝承によると、**饒速日命**が天磐船に乗り、まず高船地区の**権峯**に降臨し、その後河内の国、**嵯峨**に天下り、大和国鳥見白庭山に遷った。」と伝わっています。船をつないだ松と石船の舳先が天王極楽寺の傍にあります。

本殿は流造の板葺の一間社で、左右の**事代主神社**と**大国主神社**を一つの覆屋が被っています。



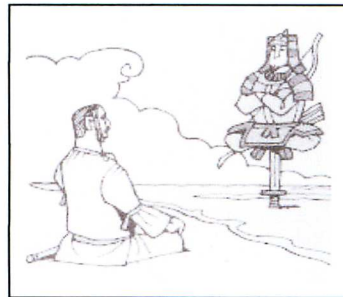
石船神社



石船神社

26、^{たけみなかたのかみ}建御名方神：建御名方神(記)

「御名方」は「南方」の意味。製鉄炉の四本の押立柱の内、南方の柱の事で、これは元山柱と称し、特に神聖視します、その柱を祀る事は製鉄の神を祀る事になります。従って建御名方神は製鉄の神と思われます。古事記には、天孫降臨に先立って高天原から第三の使者として派遣された建御雷之男神と力競べを行い、敗れて信濃国の諏訪で服従をし、信濃国の諏訪神社の祭神(旧事本紀)となりました。



建御名方神敗れる

《天孫降臨》

天照大御神は^{まさかつあかつかはやはひ あめののおしほみみのみこと}正勝吾勝々速日天之忍穗耳命に水穂の国へ降臨しなさいと伝えたが、^{あめののおしほみみのみこと}天之忍穗耳命は、自分の子^{ひこほのくににぎのみこと}日子番能邇邇芸命を推薦し、^{ひこほのくににぎのみこと}日子番能邇邇芸命が豊葦原の水穂の国へ降臨する事になりました。



高千の峯

27、^{ひこほのくににぎのみこと}日子番能邇邇芸命

「天上界の神聖な日の神、稲穂の豊穰の神」です。天照大御神の子・^{まさかつあかつかはやはひ あめののおしほみみのみこと}正勝吾勝々速日天之忍穗耳命が、高木神の娘・万幡豊秋津師比売命を妻にして産んだ第二子。父に代わって葦原中津の国への降臨を命ぜられ、筑紫の日向の高千穂の^{くじふるたけ}久土布流多氣に天降り、大山津見神の娘・木花之佐久夜日売を妻にして、火照命(海彦)、火須勢理命、火遠理命(山彦)を産みます。京田辺市には邇邇芸命を祭神とする神社に神南備神社があります。



天孫降臨

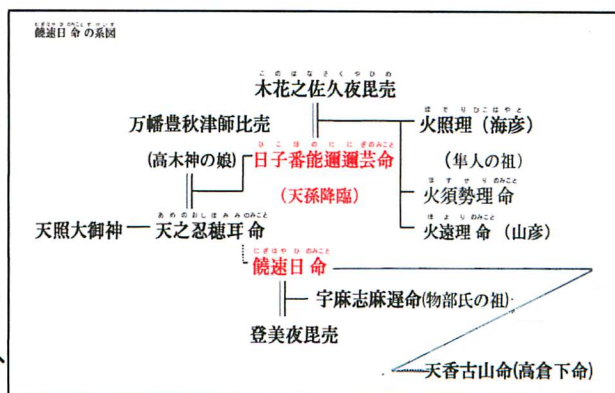
神南備神社：31 天児屋命の項、参照

28、^{にぎはやひのみこと あまてるくにてるひこほあかりのみこと}饒速日命(天照国照彦火明命)

饒速日命は、別名 ^{あまのほあかりのみこと}天火明命(古事記)、天照国照彦火明饒速日尊(先代旧事本紀)、火明命(日本書紀)等々呼ばれています。

「火明」は太陽の光や熱を神格化したもので、古事記伝には「ほあかり」は「穂赤熟」と記し、赤米が熟した「赤むら」を示しています。従って太陽神、農業神を示します。

日本書紀では天火明命は天照大御神の子・^{まさかつあかつかはやはひ あめののおしほみみのみこと}正勝吾勝々速日天之忍穗耳命と^{よろずはたとよあきつしひめ}万幡豊秋津師比売(高木神の娘)の間に生まれ、邇邇芸命の兄と言われ、邇邇芸命より先に天降ったことになっています。



饒速日命の系図

(しかし日本書紀のある訳本では、邇邇芸命の子となっている)。

そして登美^{ながすね}那賀須泥毘古^{ひこ}の妹・登美夜毘古^{とみやひめ}と結婚し、宇麻志麻遲命をもうけ、この神が物部氏の祖先となります。

また先代旧事本紀によれば、饒速日命は天磐船に乗り、まず高船地区の^{かじがみね}櫛峰に降臨し、次に河内国の河上の^{いかるがのみね}嵯峰に天降り、次いで大和国の鳥見の白庭山に移ったといわれています。

京田辺市には饒速日命を祭神とする神社は、石船神社、別名・天照国照彦火明命として朱智神社があります。

[朱智神社]

所在地：天王高ヶ峯。

- ・第11代垂仁天皇の時代(BC29～AC70)、^{か に め いがづちのおおきみ}迦邇米雷王命がこの地を治め、その子孫が朱智姓を名乗りました。綴喜郡にありこの地は古代息長氏一族に関連深い地です。三山木から西2kmにあり、地方最古の寺である普賢寺(現観音寺)も山号を息長山と言います。この辺は息長氏の本拠地であったといわれています。
- ・第16代仁徳天皇69年(381年)、この地より西方の西峰山頂に社殿を創建、迦邇米雷王、大筒城真若王を祀りました。主祭神の迦邇米雷王は開化天皇の曾孫で神功皇后の祖父です。
- ・第28代宣化天皇元年(535年)には朱智大王と称し、この地に還座されたと伝えられています。
- ・社記に「大宝元年(701年)に山城・河内・大和の国境の山に白髪のお翁の姿をした神が出現、素戔鳴尊を名乗ったと伝えられ、時の郡司の息長兼理が山の頂に社殿を建てて「大宝天王」と称しました。延暦十二年(793年)大宝天王と朱智天王を同殿に祀ったと伝えられています。
- ・平安時代初期、空海が当地を訪れ、素戔鳴尊を牛頭天王に配した(置き換えた)といわれ、以後、社名を牛頭天王社としました。
- ・近年、天王社より朱智神社に社名を戻し、郷社(1873年)となりました。



朱智神社、両部鳥居



朱智神社拝殿



朱智神社本殿

本殿への石段耳石には永正四年(1507年)、天文十年(1541年)の名があり、室町時代に再建された事が判ります。本殿は慶長17年(1612年)に建てられ、一間社流造、檜皮葺です。京田辺市内でも最大級の大きさと、向拝の木鼻の表には芙蓉、裏にはリスを彫出し、正面臺股には唐獅子や牡丹、身舎の臺股には鶴、大黒天、巾着袋など桃山様式の豪華な彫刻が施されています。現在の本殿は平成18年に修理、彩色したものです。

朱智神社・摂社の祭神

本社：^{か に め いがづちのおうのみこと}迦邇米雷王尊、

配祀として建速須佐之命、天照国照彦火明命

末社・住吉神社：^{うわつつおのみこと}上筒男命、^{なかつおのみこと}中筒男命、^{そこつつおのみこと}底筒男命(海の神、住吉三神、伊耶那岐、伊耶那美の禊ぎにより伊耶那岐の身を水に沈める事により生まれてきた神)

・大高神社：高御産霊命(最初の神、別天つ神、造化の三神)^{あめのみこと}(天御仲)



牛頭天王

主神と神産巢白神)の一人)

・三社大神社：経津主命

・健御雷之男神(火の神・火之迦具主神の血液から化成了しました)。

鹿島神宮、春日大社の祭神)神日本磐余彦尊(神武天皇)

・朝日神社：正勝吾勝速日天忍穗耳命(天照の子、誓約により勾玉から化成了しました)。

その子・邇々芸命が天孫降臨し、その子に海彦、山彦が生まれる。

・大土神社：大土御祖命(須佐之男命の子・大年神の子、土の神)

・白山神社：大山祇命(大山津見神、伊耶那岐・伊耶那美の契りにより生まれる山の神)

・稻生神社：豊宇气毘売神(豊受毘売神、伊耶那美の尿から生まれた穀物の神、外宮の祭神)

・金神社：金山毘売神(伊耶那美の嘔吐物から生まれた鉾山の神)

金山毘古神 (//)

・祈雨神社：天水分神(伊耶那岐・伊耶那美の契りにより生まれた速秋津彦神の子、龍神として祀られる)

・鎮火神社：火産靈命

・春日神社：天津児屋根命

こうして邇邇芸命は降臨する際、天宇受売命、猿田毘古神、天児屋命、布刀玉命、伊斯許理度売命、玉祖命、思金神、天手力男神の神々にそれぞれの役割を与えて供とし、豊葦原の水穂の国・現在の日向の高千穂の峯に降臨されました。

29、天宇受売命：天宇受売命・天宇受売(記)、天鈿女命(紀)

「天上界の髪飾りをした巫女」。天照大神が天の石屋戸に隠れた際、その前で神懸りして裸で舞います。又天孫降臨の際、邇邇芸命に随伴しました。その後、猿田毗古神の名を受けて「猿女の君」といい、天皇の「鎮魂祭」の秘儀に携わる猿女君氏の祖神となります。
京田辺市内には天宇受売命を祭神とする神社はありません。

30、猿田毘古神：猿田毘古神・猿田毘古之男神(記)、猿田彦大神(紀)

猿田彦命は天孫降臨の際、途中で待ち受けて邇邇芸命の一行を日向の高千穂まで道案内します。天つ神・邇邇芸命に一番に仕えた国つ神と言われます。先導した後、天宇受売命と夫婦になり、伊勢の狭長田(さなだ)に戻り、今もそこに祀られています。『日本書紀』の「一書」には、鼻の長い大男、天狗のような風態に描かれ、また天孫を道案内したことから、道祖神とされています。
京田辺市では須賀神社の祭神として祀られています。

31、天児屋命：天児屋命(記)

古事記では重要な二場面に登場します。

①：天児屋命は<天の岩屋伝説>の場面に登場します。

石屋戸から天照大御神を引き出す策を思金神が考えます。その中で天児屋命は布刀玉神と牡鹿の肩の骨を焼いて占い、祝詞を唱え、天香久山から持ってきた賢木の上の枝に勾玉、中の枝に

鏡、下の枝に白や青の布を下げた布刀玉命と一緒に捧げ持ちます。^{あめのねうすめのみこと}天宇受売命らが踊り騒ぐ様子が岩の隙間からのぞいた天照大御神にさっと鏡を差し出したのが天児屋命と布刀玉命です。そして^{あめのたじからおのかみ}天手力男神が天照大御神を引っ張り出したのでした。この場面には現在も神を祀る時の様式がみられるということです。

②：天児屋命はく天孫降臨の場面に登場します。天石屋戸の場面に出てくる天宇受売命、布刀玉命ら大勢の神々と共に部民を引き連れて、邇邇芸命に随行して地上に降りてきます。そして中臣連らの祖となったとあります。中臣は祭祀を司る家系、のちの藤原氏として繁栄します。天岩戸での役割、また藤原氏の神社・春日社に祀られているのもうなずけます。ちなみに「コヤネ」は、小さい屋根の建物の意、神託を伺う際に籠る小屋を神格化したものと考えられているそうです。

京田辺市には天児屋命を祭神とする神社は神南備神社があり、摂社には須賀神社や朱智神社があります。

[神南備神社]

所在地:薪甘南備山。「創祀年代は不詳。延喜の制には官社に列せられておりました。鎮座地は甘南備山（標高 217メートル）山頂にあります。甘南備山は古代より神の宿る山として信仰の対象とされ、惣山（そうやま）と呼ばれ近隣の人々により大切に守り伝えられてきました。平安京造営の際には京の中軸線（朱雀大路）の目印になったと伝えられています。またこの山はふるさと京田辺市のシンボルとして、新年初登りの場として、また、市内の団体歌や学校校歌にも広く歌われています。



神南備神社



神南備神社

江戸時代の祭神は高皇産靈尊、邇々芸命が祀られ、明治時代には、月読命を主神にしたこともありました。昭和5年（1930）に神殿、神門、板塀と社地を取巻く石柱、石の玉垣、石の鳥居が完成、現在の姿となります。1977 以降の祭神は、天照大神、大国主命、天児屋根命、鵜葺草不合尊(神武天皇の父)です。

32、^{ふ と だまのみこと}布刀玉命：布刀玉命(記)、太玉・太玉命(紀)、

「布刀玉」は立派な祭具の珠>という意味。玉は最も神聖な祭具の道具で、天照大神が天の石屋戸隠れた際、^{はさか}八尺の勾玉を手にとって天照大神の出現を可能にしました。又天孫降臨の際、邇邇芸命に随伴しました。京田辺市内には布刀玉命を祭神とする神社はありません。

33、^{い し こ り ど め の み こ と}伊斯許理度売命：伊斯許理度売命(記)、石凝姥・石凝戸辺(紀)、

「石を切っていがたを作り溶鉄を流し固めて鏡を作る神」。^{かかみつくり}「作鏡の連」の祖神です。京田辺市内には伊斯許理度売命を祭神とする神社はありません。

34、^{おもひかねのかみ}思金神：思金神(記)、思兼神(紀)、

古事記では思金神、日本書紀では思兼神、『先代旧事本紀』では思金神と表記します。

高御産巢日神(高皇産靈尊)の子とされるが、常世の神とする記述もあります。名前の「おもひ」は「思慮」、「かね」は「兼ね備える」の意味で、「数多の人々の持つ思慮を一柱で兼ね備える神」の意です。思想や思考、知恵を神格化したものと考えられています。「八意」は多くの知恵という意味であり、また立場を変えて思い考えることを意味します。高天原の知恵袋といっても良い存在です。

古事記に登場する場面は二度あります。

- ① <石屋戸隠れ>の際に、天の安原に集まった八百万の神に天照大神を岩戸の外に出すための知恵を授けたとされています。
- ② <葦原中国の平定>では、葦原中国に派遣する神の選定を行っています。その後の天孫降臨で瓊々杵尊に随伴しました。

また、天之忍穗耳命の妻となって邇邇芸命を産んだ姫・^{よろずはたとよあきつしのひめ}万幡豊秋津師比売は思兼神の妹にあたります。また、江戸時代後期の国学者・平田篤胤の説では、この神は天兒屋命と同一神であるとしています。京田辺市内には思金神を祭神とする神社はありません。

35、^{あめのたちからをのかみ}天手力男神：天手力男神(記)、手力男神(紀)、

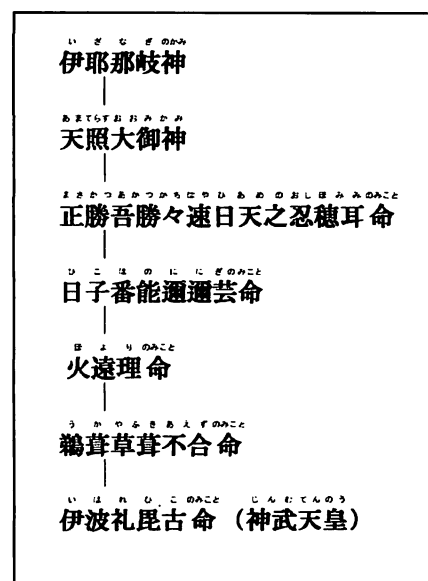
「天上界の手の力の強い男」で天石屋戸から天照大神を引き出した神。天孫降臨の際、邇邇芸命に随伴しました。佐那神社(三重県多気郡)の祭神となります。

京田辺市内には天手力男神を祭神とする神社はありません。

《天皇の寿命》

^{にぎののみこと}邇邇芸命が降臨した後の話の1つに、天皇の寿命について記されています。

地上に降りてきた邇邇芸命は大山津見神の娘、^{このはなさくやひめ}木花之佐久夜毘売を嫁に迎えたいと大山津見神に伝えると大変喜ばれ、姉の^{いわたながひめ}石奈賀毘売を添えて承諾しました。しかし石奈賀毘売は大変醜かったので、親元に帰されました。大山津見神はいたく恥じて、云いました。「姉の石奈賀毘売は醜いけれど、永遠の命を受け継ぐ事が出来ます。妹の^{このはなさくやひめ}木花之佐久夜毘売は美しいけれど、邇邇芸命の命は木の花のようにはかなく散るでしょう」と。こんなわけで邇邇芸命は天津神の子孫でありながら寿命を持つ事になったのです。



邇邇芸命(天孫降臨)～神武天皇

《海幸彦、山幸彦伝説》

37、火照理^{ほでり}（海幸彦）：火照理^{ほでり}（記）、火明命・火闌降命^{ほろり}（紀）、

38、火遠理^{ほをりのみこと}命（山幸彦）：火遠理^{ほをりのみこと}命（記）、火折命・彦火火出見尊^{ほすせりのみこと}（紀）

邇邇芸命と木花之佐久夜毘売との間に火照理^{ほでり}（海幸彦）、火須勢理^{ほすせりのみこと}命、火遠理^{ほをりのみこと}命（山幸彦）の三人の命を授かります。この長兄・海彦と弟・山彦との確執騒動が「海彦・山彦伝説」です。

弟の山彦が、兄海彦の大事な釣り針を失い海へ捜しに行きます。そこへ現れた塩椎^{しおつち}の神^{かみ}の計らいで綿津見神の宮へ行く事が出来ました。いわゆる龍宮城です。ここで豊玉毘売を娶ります。

3年の月日がたち、山幸彦が瑞穂の国に帰る事を告げると、豊玉毘売の父・大綿津見神は、「帰ると兄・海幸彦の攻撃を受けるので、これを使いなさい」と言って、塩盈珠^{しおみつたま}と塩乾玉^{しおふるたま}を渡しました。帰りつくと案の定、海幸彦は荒き心を起こして攻めてきたので、この2つの玉を使って海幸彦を屈服させたのです。この後、兄・海幸彦は弟・山幸彦（天皇の血筋）に服従します。これらの物語を表現している舞が、月読神社に伝わる隼人舞と言われています。

〔月読神社〕12 ページ参照

火遠理^{ほをりのみこと}命（山幸彦）が地上に戻ってくるときには、妻の・豊玉毘売（実は鯨の化身）は妊娠しておりました。天つ神の子は海原で産んではならないので、海岸に産殿を作って出産しようとしたが、屋根が葺き上がらない間に生まれてしまいました。そこでこの神の名は天津日高日子波限建^{あまつひこひこなぎさたけ}鵜茅草不合^{うかやふきあえずのみこと}命と呼ばれました。

豊玉毘売は火遠理^{ほをりのみこと}命にお産の現場を覗き見され、お怨みになりましたが、恋しき心に耐えられず、御子の養育を妹の玉依毘売^{たまよりひめ}に託します。後に玉依毘売は天津日高日子波限建^{あまつひこひこなぎさたけ}鵜茅草不合^{うかやふきあえずのみこと}命の妻となり、伊波礼毘古^{いはれひこのみこと}命（後の初代神武天皇）をお生みになりました。